様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０５２９

研究課題名（和文）近現代日本語彙における「基本語化」現象の記述と類型化

研究課題名（英文）Description and Categorization of "Transfer from Non-Basic Vocabulary to Basic Vocabulary" Phenomenon in Modern Japanese Vocabulary

研究代表者
金　愛蘭（KIM, Eran）

広島大学・教育学研究科・講師

研究者番号：９０４６６２２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，近現代日本語の書きことば語彙における「基本語化」現象を統一的に説明し理論化するための，一般性の高い方法論の構築を目的として，近代雑誌における漢語および現代新聞における外来語・和語の「叙述基本語化」を事例に，基本語化の量的・質的な側面からの検討を行った。主な成果として，基本語化した語の抽出には，累積使用率による語彙のレベル分け，増加傾向係数，対数化特化係数散布度などの指標が有効であること，基本語化の過程や要因を解明するには，基本語化する語が既存の基本語との間に緊密な語彙（類義語）体系を構築する動きや，そうした動きをひきおこす文章・文体の変化に着目する必要があることなどを見出した。

研究成果の概要（英文）：This research aims to construct a highly generic methodology for unified explanation and theoretical description "Transfer from non-basic vocabulary to basic vocabulary" in modern written Japanese.
We examined from the quantitative and qualitative aspects of phenomenon, using case about "basic descriptive vocabulary", of Kango(words of Chinese origin) in modern magazines and loanwords / Wago (words of Japanese origin) in the second half of 20'th century newspapers. As a main result, we clarified that indices such as level classification of vocabulary by cumulative usage rate, increasing trend coefficient, logarithmic specialized coefficient scattering degree, etc. are effective for extraction of basicized words. Furthermore, we found that we need to pay attention that in order to elucidate the process and factors of phenomenon, the word to be basicized is closely related to existing basic words (synonyms) , and to changes in written Japanese style that cause such movements.

研究分野：語彙論・意味論

キーワード：基本語彙　基本語化　近現代日本語　語彙・意味　コーパス　書き言葉　類義語・類義体系　語種

１．研究開始当初の背景

日本語の，とくに書きことばの基本語彙については，近代以降のマクロな変化の動向が，ある程度明らかにされている。宮島達夫(1967)は，国立国語研究所の「雑誌 90 種の語彙調査」(1956 年)で得られた上位 1000 語が歴史上いつごろから使われているかを調べる中で，明治時代には抽象名詞の漢語が，大正・昭和時代には具体名詞の外来語が現れ，増えた可能性があるとした。また，石井正彦(2013)は，上の 90 種調査と，同じ国語研究所の「月刊雑誌 70 誌の語彙調査」の結果とを比較し，現在は，それに次ぐ第三の段階として，外来語の抽象名詞が増え，基本語彙の中に進出している時期と考えられるとしている。

こうした基本語彙のマクロな変化は，個々の語が新たに基本語彙の仲間入りをする「基本語化」と，逆に基本語彙から外れる「周辺語化」というミクロな変化をその内実としている。しかし，近現代日本語の大規模な通時コーパスが整備されていない状況では，個別の語の使用の変化動向を明らかにすることはきわめて困難であり，当然，基本語化・周辺語化した語を特定することも困難であった。基本語化・周辺語化は，基本語彙の変化から当然想定される現象であるが，それを実証することはできなかったのである。

しかし，近年，通時的なコーパスを構築・利用して，個別の語の「基本語化」現象を実証的に把握･記述しようとする研究が行われ始めた。一つは，金愛蘭(2011)による「20 世紀後半の新聞における外来語の基本語化」の研究であり，いま一つは，田中牧郎(2013)による「明治後期から大正期の総合雑誌における漢語の基本語化」の研究である。

金(2011)は，1950 年から 2000 年までの『毎日新聞』について，10 年おきに各年平均 200 万字を超える大規模な「通時的新聞コーパス」を作成し，その語彙調査に基づいて「トラブル」「ケース」「チェック」など抽象的な意味を表す外来語が 20 世紀後半の新聞において「基本語化」する現象を見出し，それらが類義の和語・漢語があるにもかかわらず基本語化する要因を言語内的に追究した。

田中(2013)も，国立国語研究所において自身がその構築を主導した「太陽コーパス」を用いて，近代の文章語の成立過程で同様の基本語化が「活躍」「展開」「表現」といった漢語を中心に生じていたことを見出し，そうした抽象的な意味をもつ漢語が基本語化する背景に，より基本的な位置にある和語の影響や，和語との間での緊密な意味関係の構築があったことを明らかにした。

しかし，こうした「基本語化」の研究は緒に就いたばかりで，その記述の方法や，理論化の枠組みは定式化されていない。金(2011)も田中(2013)も，その方法論は独自に考案したもので，言語学的・統計学的な検証や追試を経たものではない。現代の新聞における外来語の基本語化と，近代の総合雑誌における漢語の基本語化とは，時代も文章類型も異なる現象ではあるが，日本語の基本語彙の変化・形成という言語変化の中で，一連のものとして位置づけられるべきであろう。そして，そのためには，和語の基本語化も含めて，これらを統一的に記述・理論化する枠組みを設定することが必要になる。

２．研究の目的

以上のような問題設定のもと，本研究は，

①近代雑誌における漢語の基本語化(田中)

②現代新聞における外来語の基本語化(金)

③現代新聞における和語の基本語化(石井)

という三つのテーマを設定し，それぞれの調査と分析から，近現代日本語の書きことばの語彙における「基本語化」現象を統一的に記述し理論化するためには，どのような枠組みを設定することが有効であり，また，必要であるかを検討する。現在のところ，その枠組みは，大きく，(1)基本語化の量的な側面を把握するためのものと，(2)基本語化の質的な側面を把握するためのものとに分けられると想定している。

(1)は，基本語彙の範囲を確定し，基本語化した語を特定するための計量的な研究法の枠組みである。「基本語化」とは，語彙の周辺部にあった語が基本語彙の仲間入りをすることだから，そうした語の抽出・特定のためには，まず，基本語彙の範囲を確定しておかなければならない。しかし，基本語彙の計量的な選定法については，これまでもいくつかの提案はあったものの，定まった方法は確立していない。また，通時的なコーパスにおいて，個別の語の使用がどのように変動した場合にそれを「基本語化」と判断するかについても，定式化された方法はない。金(2011)や田中(2013)の方法も独自に考案したもので，統計的な手法としての吟味を経たものではない。

(2)は，(1)を前提として，基本語化したと特定された語が，その過程において，また，類義語との関係において，自身の性質や機能をどのように変えたのか，言い換えれば，語が基本語化するとはその性質･機能をどう変えることなのか，そして，そうした変化をもたらす要因は何なのかを明らかにするための，質的な研究法の枠組みである。語は，基本語化する際に，意味(語義)を中心とする語彙的性質をはじめとして，語構成，文構成，文章構成にかかわるさまざまな性質・機能を変化させるものと考えられるが，それぞれの変化から「基本語化」現象の特徴や傾向性をどのようにして導き，さらに，その要因をどのように追究するのか，考えていかなければならない。

３．研究の方法

以上のような検討を，上述の三つのテーマを設

けて行うにあたって，本研究では，書きことばの基本語彙の中でもとくに「叙述語」に注目する。

書きことばの基本語彙論は，その選定を目的とする国立国語研究所の一連の語彙調査およびそれに基づく計量語彙論的研究によって主導されてきた。それは，「基本語彙とは何か」という概念規定から始まって，その計量的な選定法を考案・高度化し，それにより選定された基本語彙の評価にまで及ぶものであったが，そこで想定された基本語彙は，「基本度」という尺度からレベル分けされることはあったものの，基本的には等質のものとされ，その内実(質的な相違に基づく分類)が問題とされることはなかった。

そうした基本語彙の分類は，寿岳章子・林四郎・田中章夫といった個人の研究によって仮説的に検討された。とくに，寿岳(1967)は「(1)骨組み語・(2)テーマ語・(3)叙述語」という分類を提案し，それぞれ，(1)日本語で書いたり話したりする以上絶対に必要な語，(2)言語資料の内容によってその出現・使用が規定される語，(3)言語資料の叙述方法に関連して用いられる語，とした。この分類は，宮島(1984)が評価するように「語彙論一般にとって基本的な概念」といえるものであり，基本語彙の内実に迫るものとしてもっと注目されてよい。とくに叙述語は，仮に，骨組み語を機能語，テーマ語を内容語，叙述語をその中間的な性質をもつものと考えるなら，近年のテクスト言語学などで注目されている「談話構成語」(McCarthy1992)の機能にも重なるところがあり，その重要性が再認識される可能性がある。

金と田中の研究は，書きことばの基本語彙の中にこうした「叙述語」に相当する部分があり，それが文章の叙述方法の変容によって，新たな外来語や漢語を仲間入り(基本語化)させながら変化している，という可能性を示すものである。本研究は，こうした可能性を重視して，「近代雑誌における漢語」「現代新聞における外来語および和語」のように，特定の文章類型における基本語化に注目する。

４．研究成果

4.1 近代雑誌における漢語の基本語化

4.1.1 概要

語彙の中心に安定してよく使われる「基本語」があり，語彙の周辺に不安定であまり使われない「周辺語」があると見て，ある語が周辺語から基本語へと段階的に移行していく現象を「基本語化」ととらえる。その基本語化について，近代(明治後期～大正期)の雑誌を資料として，①その語彙をどのように抽出するかの量的研究，②それはどのように進むのかの質的研究，の二側面から研究を進めた。①については，基本語化の過程をとらえることができる語彙を，コーパスの頻度に基づいて抽出し，②については，抽出された語彙から，個別の語を事例として取り上げて，詳細な語誌研究を行った。

4.1.2 コーパスから基本語化した語彙を抽出する研究

国立国語研究所で開発された，『国民之友コーパス』(1887～1888 年対象)，『太陽コーパス』(1895 年，1901 年，1909 年，1917 年，1925 年対象)を用いて，各年次の全語彙を，高頻度語彙から低頻度語彙まで，5 段階にレベル分けを行った。そのレベルが，最も低いレベルから最も高いレベルまで段階的に上がっていく語を，基本語化した語彙として抽出した。そうして抽出された語彙を見わたすと，(1)近代的な社会制度や科学技術を指す語彙，(2)口語性の強い語彙，(3)抽象的な意味を表す語彙の三つに分類できた。このうち(1)は，社会の変化に，(2)は文体の変化に，それぞれ直接起因するものと考えられるが，(3)は，そうした外的要因が想定できない。この(3)は，そのほとんどを漢語が占めるが，近代における語彙自体の変化に起因するものと想定されるため，具体的事例を取り上げ，詳細な語誌研究を行うことが有用と考えられた(田中 2015：図書 7)。なお，この研究に用いたコーパスが 2016 年度に大幅に増補され，『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』として公開されたことに合わせ，新しいデータによって，基本語化した語彙を抽出し直し，より信頼性の高い結果を得ることもできた(金・田中・石井・中里 2017：学会発表 1)。

4.1.3 基本語化した語の語誌研究

上記の(3)の語彙のうち，事例研究として，「拡大」「援助」(田中 2015：雑誌論文 6)，「期待」(田中 2016：雑誌論文 3)，「発展」(金・田中・石井・中里 2017)を取り上げて，その語誌を詳細に記述した。まず，「拡大」においては，新たな語義を加えながら基本語化していくことと，既存語「広がる・広げる」が言文一致によって基本語化するのと連動し，この語と類似性を高め，意味的・文体的な関係を強めていくことが分かった。また，「援助」においては，対象や主体に取る語句の性質を変えながら基本語化していくことと，既存の基本語「助ける」と類似性を高め，意味的・文体的な関係を強めていくことが分かった。そして，「期待」については，既存の基本語「待つ」の意味変化に沿った形で意味を変えながら基本語化し，従来基本語であった「期する」と交替していく過程も見ることができた。さらに，「発展」は，既存の基本語「伸びる」「伸ばす」の意味・用法の枠組にしたがって基本語化し，それらとの間に使い分けの関係を構築していく過程を確かめることができた。以上のことから，近代の雑誌において，抽象的な意味を表す語彙が基本語化する際には，既存の基本語との間に緊密な語彙体系を構築する動きがあることが導き出された。

4.2 現代新聞における外来語の基本語化

4.2.1 概要

現代(20 世紀半ばから現在まで)の新聞における「外来語の叙述基本語化」に注目し，(1)基本語化の量的な側面の検討として，①基本語化した外来語が基本語彙の構造のどの部分・領域に進出しているのかを，基本語彙の分類枠を用いて明らかにすること，(2)基本語化の質的な側面の検討として，②外来語の基本語化には，類義語の上位語に立つというような語彙体系上の変化だけでなく，上位語特有の文章構成機能を獲得するという文章論的側面もかかわっていることを確認すること，また，③基本語化に「挫折」した外来語の事例を見出し，それらの「挫折」の要因を探ることによって基本語化の過程や要因をより多角的に追究すること，を行った。

4.2.2 基本語彙構造における外来語の進出領域

20 世紀後半の「通時的新聞コーパス」において明確な増加傾向を示し，基本語化した可能性のある 200 語余りについて，それらが基本語彙の構造のどの部分･領域に進出しているのかを，林四郎(1982)の基本語彙分類枠 7 層のうちの 3 層(準文法機能語・思考基本語・叙事基本語)にあてはめることによって調査した。その結果，これらの外来語は，叙事基本語(の第二段階)に最も多く進出しているが，それよりも基本的な層である思考基本語への進出はその半数以下にとどまっていて，最も中核にある準文法機能語にはまったく進出していないことなどがわかった。総じて，基本語化した外来語にも具体名詞の叙事基本語が多いが，McCarthy(1992)が「機能語と内容語との中間にあり，双方の性質を備えている」とする「談話構成語」(discourse-organising words)や，寿岳(1967)が「テーマ語か叙述語かの判別が難しい」とした「事象の捉え方に関わる語」に相当する思考基本語に，少なからぬ外来語が進出していることが注目される(金 2015：図書 6)。

4.2.3 文章構成機能からみた外来語の基本語化

「通時的新聞コーパス」の調査から，抽象名詞の外来語が，(「ケース」などにみられる)指示語句と(「トラブル」などにみられる)同格連体名詞という二つの形式(用法)によって，「再表現」を核とする文章構成機能を獲得･発展させ，その使用量を増やしている事実を発見・提示した。指示語句と同格連体名詞とは，いずれも，先行する叙述を名詞化して再表現し，後続の叙述につなげていくという文章展開上の機能をもつ。20 世紀後半の新聞文章は，抽象的な外来語にこうした文章構成機能を担わせ，その結果として，新聞基本語彙の中に抽象的な外来語が進出することを招いたものと考えられる。外来語の基本語化には，語彙論的な側面だけでなく，文章構成機能という文章論的な側面も関係する可能性が高い。

4.2.4 外来語「クレーム」の基本語化とその“挫折”

「通時的新聞コーパス」の調査によって，1970 年以降使われるようになった外来語「クレーム」は，1991 年ごろまではその使用量を増加させて基本語化に向かうように見えたが，その間も類義語「苦情」「文句」を上回ることはなく，また 2000 年から 2010 年にかけては使用量を大きく減らし，結局，その基本語化は“挫折”したことがわかる。「クレーム」は，〈経済〉から〈非経済〉へと意味を拡大し，それに伴って使用量を増やして基本語化の方向に向かいかけたが，その多くが「クレームをつける」という動詞句であったために，「文句をつける」などがもつマイナスの感情的意味を付着させてしまい，より抽象的な意味をもつ(類義語の)上位語として基本語化することができなくなってしまったものと推測される(金 2015：学会発表 7)。国立国語研究所(1965)は，「類義的な外来語のふえる理由」の一つとして，感情的・心理的な理由(a.目新しさ・新鮮さ，b.明るい・自由な感じ，c.より強い実感，d.高級そうな感じ，e.不快な語感・連想を避ける)をあげるが，語感が外来語の(いわゆる「国語化」以上の)基本語化にどのように作用するかについては，こうした「挫折語」なども考慮しつつ，なお検討していく必要がある。「挫折」の要因を探ることは，基本語化の過程や要因をより多角的に把握することにつながる可能性がある。

4.3 現代新聞における和語の基本語化

4.3.1 概要

現代(20 世紀半ばから現在まで)の新聞における「和語の叙述基本語化」に注目し，⑴基本語化の量的な側面の検討として，①叙述語抽出のための統計手法の開発，および，②それによる「通時的新聞コーパス」からの叙述基本語化した和語の抽出を行い，⑵基本語化の質的な側面の検討として，③叙述基本語化したいくつかの和語動詞について詳細な語誌記述を行い，④それらの基本語化の過程・要因を探索的に検討した。①については，単語の使用頻度とともに，紙面によるばらつきを利用した「対数化特化係数散布度」を指標とする方法を開発し，②については，本研究において増補した「通時的新聞コーパス」を用いて，その使用頻度を有意に増大させた高頻度語から「対数化特化係数散布度」を指標として叙述基本語化した単語を抽出し，現代の新聞が漢語や外来語以上に和語(とくに和語動詞)を新たな叙述語に加えていることを見出した。③④については，談話引用動詞「話す」が基本語化する過程を，類義語「述べる」「語る」「言う」との比較において明らかにするとともに，その背景・要因として，現代新聞における話しことば的な文体への変化によって，書き手(記者)が取材対象である談話主体に配慮する，その結果として「話す」が使われるようになった可能性を指摘した。

4.3.2 叙述基本語化した語の抽出

叙述基本語化した語を見出すには，基本語彙の候補となる高頻度語(骨組み語・叙述語・テーマ語

が混在する)から，叙述語を分離する必要がある。本研究では，各語の紙面によるばらつきを「対数化特化係数散布度」として指標化し，それによって高頻度語から叙述語を分離・抽出する方法を開発した(石井 2015：図書 8)。

対数化特化係数散布度は，特徴語抽出の指標である特化係数を対数化してその範囲(最大値－最小値)を求めたものであり，これを指標として新聞の高頻度語の度数分布図を描くと(図１)，ほぼ双峰性の分布形となって散布度の小さい語群と大きい語群とに分離する。前者には(骨組み語を含む)叙述語，後者にはテーマ語が多く含まれることが予想される。

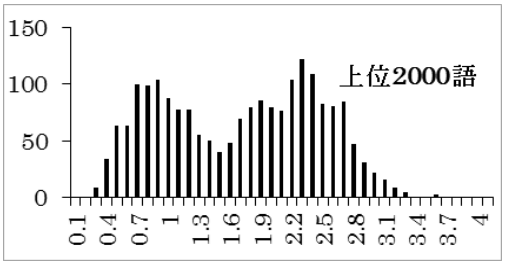

図１　新聞高頻度語の散布度の分布
(横軸：対数化特化係数散布度，縦軸：語数)

この方法を「通時的新聞コーパス　最新版」に適用し，一定の基準によりこの半世紀間に叙述基本語化した 102 語を抽出した。語種の内訳は，和語 46，漢語 50(サ変動詞 13 語を含む)，外来語 2，混種語 4 となり，現代の新聞が，(漢語や外来語以上に)和語，なかでも和語動詞を新たな叙述語に加えていることが明らかとなった。

4.3.3 談話引用動詞「話す」の基本語化とその要因

上の 102 語のうち，2010 年の順位で最上位にある「話す」について，類義の和語動詞「言う」「述べる」「語る」とともに，その叙述基本語化の様相を詳しく観察した。「話す」は(書き手(記者)が関係者・識者等の談話を(伝達相手をニ格で示すことなく)ト節で引用して読者に示す)「談話引用用法」において 1991 年以降その使用を大きく増やしており，「話す」の叙述基本語化がこの用法の獲得によって支えられたことがわかる。「終止用法」の量的推移を見ると，「言う」「述べる」「語る」の３語体制だったところに「話す」が加わり，とくに同じ日常語の「言う」に取って代わるという側面が強い。その要因としては，現代新聞における話しことば的な文体への変化によって，書き手(記者)が取材対象である談話主体に配慮するその結果として，「言う」よりもやや待遇度が高く，談話主体の行為が(一方的ではなく)説明的・協調的・相互的であるというニュアンスをもつ「話す」が使われるようになった可能性が考えられる(金・田中・石井・中里 2017：学会発表 1)。

4.4 総括と今後の課題

本研究では，近現代日本語の書きことば語彙における「基本語化」現象の理論化に向けて，基本語化の⑴量的および⑵質的な側面を把握するための方法論的な枠組みを検討した。⑴量的な側面の枠組みについては，基本語彙の区分や分類枠にもとづいて「叙述語」の範囲を検討し，また，基本語化した語を特定するための計量的な手法として，累積使用率による語彙のレベル分け，増加傾向係数，対数化特化係数散布度などの指標が有効であることを明らかにした。⑵質的な側面の枠組みについては，コーパスにもとづく詳細な語誌記述によって，主要な語の基本語化の過程を類義語とともに明らかにし，近代の雑誌にあっては基本語化する語が既存の基本語との間に緊密な語彙(類義語)体系を構築する動きを見出し，現代の新聞においては外来語や和語の基本語化とそれをひきおこす文章・文体の変化との動的な関係を見出した。この，語彙体系の変化と文章・文体との変化とがどのように関連しつつ「基本語化」現象がひきおこされるのか，それを解明するにはどのような方法論が有効であるのかを検討することが，今後の主要な課題である。

［引用文献］

- 石井正彦(2013)「和語・漢語・外来語―基本語彙に見る攻防―」『日本語学』32-11
- 金　愛蘭(2011)『20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』阪大日本語研究別冊 3
- 寿岳章子(1967)「源氏物語基礎語彙の構成」『計量国語学』41
- 国立国語研究所(1965)『類義語の研究』秀英出版
- 田中牧郎(2013)『近代書き言葉はこうしてできた』岩波書店
- 林　四郎(1982)「日常語・専門語および表現語」『講座日本語学１　総論』明治書院(『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院，1987 に再録)
- 宮島達夫(1967)「現代語いの形成」『ことばの研究 第 3 集』国立国語研究所
- 宮島達夫(1984)「〔書評〕寿岳章子著『室町時代語の表現』」『国語学』139
- McCarthy, M.(1992)*Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge Language Teaching Library. CUP.［安藤貞雄・加藤克美訳『語学教師のための談話分析』大修館書店，1995］

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計　6 件)

(1) 石井正彦(2017)「文の長さの統計モデル」『現代日本語研究』9，pp.109-123，査読無
(2) 金　愛蘭(2016)「二〇世紀後半の書きことばにおける『抽象的な外来語の基本語化』について－語彙の周辺部から中心部へ『進出』する外来語」『日本語学』35-7，明治書院，pp.12-22，招待有

(3) 田中牧郎(2016)「近代における『期待』の基本語化－雑誌コーパスによる記述－」『国語語彙史の研究』35，pp.1-21，査読有
(4) 石井正彦(2016)「名詞的表現による文内情報提示の構造：新聞社説の抽象名詞『方針』を例に」『待兼山論叢(日本学篇)』50，pp.21-48，査読無
(5) 石井正彦(2016)「リジット解析：計数データを用いた言語研究への適用」『計量国語学』30-6，pp.357-377，査読有
(6) 田中牧郎(2015)「近代新漢語の基本語化における既存語との関係－雑誌コーパスによる『拡大』『援助』の事例研究－」『日本語の研究』11-2，pp. 68-84，査読有

〔学会発表・招待講演など〕(計　11 件)

(1) 金　愛蘭・田中牧郎・石井正彦・中里理子「近現代『基本語化』現象の記述と理論化－書きことばの叙述語を中心に－」日本語学会 2017 年度春季大会(ワークショップ発表)，査読有，2017 年 5 月 14 日，関西大学
(2) 石井正彦「連語の慣用性はいかに獲得されるか：新聞における個別連語の流行現象を手がかりに」国語学研究会，招待有，2017 年 3 月 15 日，東北大学
(3) TANAKA Makiro,　Vocabulary Development in Modern Written Japanese,　Bakumatsu-Meiji Symposium, 招待有, 2016 年 11 月 3 日, ナポリ東洋大学（イタリア）
(4) 田中牧郎「近代における日本語の革新－訳語，漢語，そして和語」総合研究大学院大学学術シンポジウム，招待有，2016 年 1 月 22 日，総合研究大学院大学
(5) 石井正彦(2016)「文の長さの統計モデル」計量国語学会第 60 回記念大会，査読有，2016 年 10 月 8 日，日本大学
(6) 石井正彦(2016)「現代新聞における和語動詞の叙述基本語化 －談話引用動詞 "話す" の場合」国立国語研究所共同研究プロジェクト研究発表会，招待有，2016 年 1 月 24 日，国立国語研究所
(7) 金　愛蘭(2015)「外来語『クレーム』の基本語化とその “挫折” 」第 8 回コーパス日本語学ワークショップ，査読有，2015 年 9 月 1 日，国立国語研究所
(8) 金　愛蘭(2015)「文章構成機能からみる『外来語の基本語化』－20 世紀後半の通時的新聞コーパスを資料として－」広島大学国語国文学会平成 27 年度年度研究集会，招待有，2015 年 7 月 2 日，広島大学
(9) 金　愛蘭(2015)「現代日本語語彙における『外来語の基本語化』－20 世紀後半の通時的新聞コーパスを資料として」広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育研究会，招待有，2015 年 5 月 7 日，広島大学
(10) 田中牧郎(2015)「現代の語彙はこうしてできた」愛知教育大学学術講演会，招待有，2015 年 12 月 3 日，愛知教育大学
(11) 石井正彦(2015)「交互平均法とリジット解析」計量国語学会第 59 回大会，査読有，2015 年 9 月 26 日，神戸大学

〔図書〕(計　9 件)

(1) 田中牧郎(2017)『データで学ぶ日本語学入門』計量国語学会編，朝倉書店，pp.84-95
(2) 金　愛蘭(2016)「語彙の体系性・多様性を意識し相対化する：事前課題とグループワークを取り入れた授業実践」『日本語学の教え方－教育の意義と実践』くろしお出版，pp.55-74
(3) 田中牧郎(2016)「『浮雲』の語彙の量的構造」『日本語研究法【近代語編】』おうふう，pp.53-64
(4) 田中牧郎(2016)「語種」斎藤倫明編『日本語語彙論Ⅰ』ひつじ書房，pp.241-274
(5) 石井正彦(2016)「語形」『日本語語彙論Ⅰ』ひつじ書房，pp.135-165
(6) 金　愛蘭(2015)「基本語彙構造における外来語の進出領域」『日本語語彙へのアプローチ－形態・統語・計量・歴史・対照－』おうふう，pp.131-146
(7) 田中牧郎(2015)「明治後期から大正期に基本語化する語彙」『日本語語彙へのアプローチ－形態・統語・計量・歴史・対照－』おうふう，pp.234-250
(8) 石井正彦(2015)「無性格語は実在するか—特化係数とその散布度による検討」『日本語語彙へのアプローチ－形態・統語・計量・歴史・対照－』おうふう，pp.131-146
(9) 石井正彦・斎藤倫明編著(2015)『日本語語彙へのアプローチ－形態・統語・計量・歴史・対照－』おうふう，p313

6．研究組織

(1) 研究代表者
金　愛蘭(KIM Eran)
広島大学・教育学研究科・講師
研究者番号：90466227

(2) 研究分担者 1
田中　牧郎(TANAKA Makiro)
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号：90217076

研究分担者 2
石井　正彦(ISHII Masahiko)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：10159676